



動物のか、人間のか

隙間時間に、偉人の話をしています。

すでに、松下幸之助やエジソンはじめ、子どもたちがどこかで聞いたことのある名前が教室でも会話の中に少しずつ登場するようになってきました。

なぜ、そうした話を伝えているのか。

突き詰めると、「偉人」のエピソードを知ってもらいたいというより、その「生き方」を学んでほしいという思いがあります。

彼らの生き方には、たいていある共通点が存在します。

例えば、太鼓はたたくと、ドンと音が出ます。

たたく（刺激）→音が出る（反応）

風船は針で突くと、割れます。

針で突く（刺激）→割れる（反応）

今後の理科の学習でも、色んな実験をしますが、それらも全て、「刺激」があって、「反応」があります。

いわゆる、「刺激即反応」です。

図にするとこんな感じ。



自然界にあるものは、基本的に全てこの仕組みになっていますが、唯一当てはまらないものがあります。

それが、人間です。

例えば、ショーウィンドウに並んだ美味しそうなケーキを見たとき。

あなたの大好きなケーキが、ずらりと並んでいます。

脳内に「美味しそうなケーキがある」という刺激（情報）が入力された瞬間です。

しかし、いくらケーキ好きだとしても、全員が全員、衝動を抑えきれずにケーキを買うわけではありません。

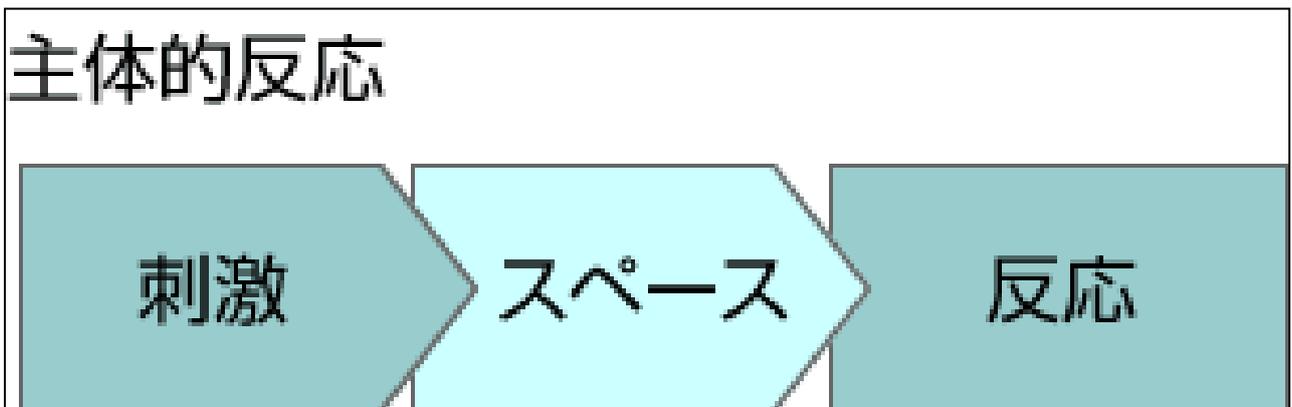
買う人もいるでしょうし、一瞥もくれずに通り過ぎる人もいるでしょうし、その日は我慢して別の機会に買いに来る人もいます。

つまり、われわれ人間は、刺激に対する反応を選ぶための“スペース”が存在するということです。

「刺激即反応」ではなく、自分の意志で態度や行動を選ぶこと。

これを「主体的反応」といいます。

図に表すと、こうなります。



では、質問です。

みんなは、「刺激即反応」で生きているのでしょうか。

それとも、「主体的反応」で生きているのでしょうか。

自分の「意志」の力をきちんと使って、人生を生きているのでしょうか。

以前も教室で紹介したスティーブンコヴィーが述べている「7つの習慣」の内、1番目に来ているのが、この「主体的に生きよ」なのです。

与えられた環境や能力や状況のせいばかりにしているのならば、いつまでたってもあなたの人生は、環境次第・能力次第・状況次第で決まってしまう。

ちなみに、主体的に生きることができていない人の口癖はこれだそうです。

「〇〇のせいでできなかった。」

「□□があれば私だってできたのに。」

「もともと△△だから無理なんだよね。」

つまり、環境や能力によって自分の人生が全て決まってしまうという考えです。

これでは、いつまでたっても自分の力で人生を拓くことはできません。

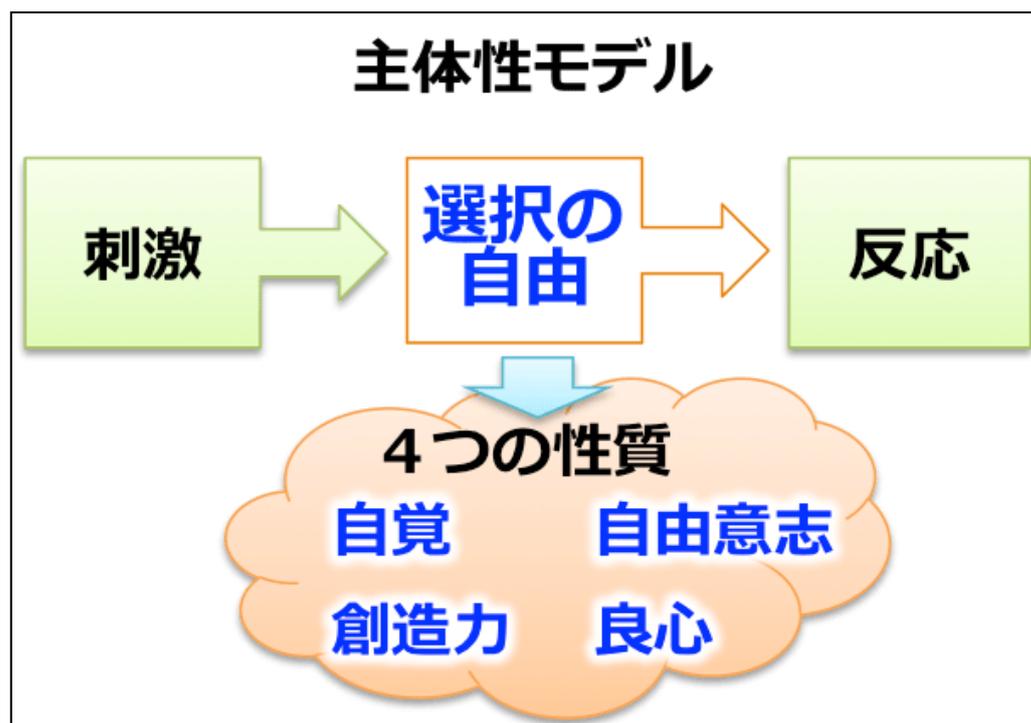
なぜなら、与えられた環境によってすべてが決まってしまうのですから。

ですから、コヴィーさんは「主体的に生きよ」といっているわけです。

どんな刺激があっても、それに対する反応は自分の心が決めます。

この選択力、解釈力こそが、私は心の力だと考えています。

自分の意志を働かせ、自分の目的を自覚し、人に尽くす気持ちや未来を見据える創造力を働かせるとき、人は、他の動物では考えられない反応を起こします。図に表すところです。



私の友だちに、プロの演奏家として活躍している友人がいます。(名古屋フィルハーモニーの副主席奏者です)

その友人は、小さい頃からバイオリンを習ってきました。

しかし、ある時期から練習が嫌で嫌でたまらなくなりました。

習い事やクラブ等に打ち込んでいる人には、往々にして訪れることかもしれません。

練習に身が入らなくなっていたその時。

ひょんなことから、友人は指先を怪我します。

怪我をしてから約 1 か月間。

指先が完治するまでは、楽器を弾いてはいけないと言われたそうです。

けれども、楽器を弾けないその間に、友人はひしと感じたのだと言います。

自分が、どれほど楽器を好きだったかという事実です。

怪我が治り、再び楽器を手にしたその瞬間に、プロを真剣に目指そうと思ったのだと話していました。

人生の色々な「節」や「逆境」は、自分が大きく伸びていく為のチャンスでもあります。

でも、「刺激即反応」の生き方では、チャンスにはなりません。

その物事をどう受け止め、解釈し、行動を選択していくか。

ここに自分の「意志」を働かせるとき、「逆境」や「節」はチャンスへと変貌を遂げます。

最年長ノーヒットノーランなどで有名な山本昌選手。

彼の股関節は、珍しい形をしており、外側を向いています。

つまり、「がに股」です。

さらに、「内また」も加わっており、非常に奇異な形をした足だと言います。

彼の若手時代を指導したコーチ全員の見解はこうでした。

「股関節の向きといい、膝が割れている所といい、野球選手としてはとても大成しないと思った。」

しかし、股関節と膝のマイナス×マイナスの要素が、彼に言わせれば「奇跡」のめぐり合わせだったのだそうです。

山本投手の得意とする球種は、「スクリーン」です。

これは、言葉でいうと「抜く球種」なのだと言います。

うまく抜けてこそ、いい変化をする。

一見奇妙な股関節と膝は、ボールの力をうまく抜くために絶妙な働きをしてきているのだと著書で語っていました。元々不利だと言われている環境（刺激）を、考え方で（反応）を変えたのです。

「発明王」と呼ばれるエジソン。

彼は、小学校の頃、まるで勉強についていけませんでした。

さらに「頭が悪い」と教師に非難されたことから、登校拒否になり、わず

か3か月で学校を退学しています。

内向性の強いエジソンは、じっくりものを考えるタイプだったといいます。次々に与えられる知識をうのみにして、頭にたたきこむということができません。

学習のテンポが極めて遅かったことも、学校で中傷された理由でした。

しかし、自分のペースを決して崩さず、こだわりを捨てないのが彼の強みでした。

その才が、数々の発明品を生み出しました。

電気、蓄音器、映写機などなど。

どれも、現在の私たちの生活に欠かせない道具の一部となっています。

授業についていけないことも、ペースが遅いことも、決してマイナスではなかったことを、彼が教えてくれています。

人生は、能力や環境だけでは決まらないのです。

そして、これらの「主体的に生きる」最たる例が、あの人物です。

「経営の神様」と呼ばれる松下幸之助。

彼は、

「自分を出世させたのは、3つのことしか考えられない」と生前のインタビューに答えました。

その“3つ”とは、一体何か。

これです。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">1つ目は、家が貧乏だったこと。2つ目は、学校へ行っていないこと。3つ目は、病気がちで体が弱かったこと。 |
|---|

小さい頃から、自分の家は貧しかった。

そのおかげで、お金の大切さを誰よりも感じることができた。

他の人が、高校・大学へ行く中、自分は小学校しか出ていない。

そのおかげで、人一倍本を読んで勉強をしようと思えた。

身体が病弱で、目一杯体を動かすことができない。

そのおかげで、人に頼り、人を大切に育てることを学んだ。

このように、「経営の神様」は答えたわけです。

貧乏も、学校に行っていないことも、病弱だったことも、全て環境要因です。

外部からの刺激です。

でも、松下幸之助は、それによって自暴自棄になりませんでした。
丁稚奉公に出されている間も、人のためにひたむきに働きました。
学校へ行っていません。

でも、会社に入ってくる人はみんな高学歴。

そんな状況だからこそ、「人一倍本を読もう」と考えたそうです。

病弱を言い訳に逃げることもしませんでした。

むしろ、それを逆転の発想で考え、人に積極的に力を借りつつ、人を大切に育てることを学ぼうとしたのです。

「貧乏だから～～ができない」

「頭が悪いから～～は難しい」

「力が無いから～～は不可能」

こうした「刺激即反応」の生き方を、松下幸之助は一切していなかったのだと思います。

もう一度改めて書きます。

外部要因、環境要因によって、人生は決まりません。

そのことをどう受け止め、反応するかによって、人生は決まります。

だからこそ、この「選択力」「解釈力」は人生を大きく変える力になり得るのです。

ちょっと難しい話になってしまったかもしれませんが、大切な内容なので、一所懸命書きました。

今度、道徳の勉強でも補足したいと思います。

☆↓読者ページはこちらから↓☆ご意見ご感想など気軽にお寄せください

<https://docs.google.com/forms/d/1qqf4cPLcjpcWaimWdu-6IFM73JahODYK4ROldg7jLxM/edit>

